

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520193

研究課題名（和文）エマスンにみる、詩とアメリカ思想の親近性についての研究

研究課題名（英文）Reconception of the Significance of Emerson' s Poetry

研究代表者 小田 敦子（ODA ATSUKO）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：80194554

研究成果の概要：エマスンの詩を日米の研究者が共同で精査し、詩にはアメリカの代表的知識人であるエマスンの思考全体を象徴する、或いは、表題化する機能があることを発見した。キリスト教後、民族国家後の精神性、意識の流れや深層心理、日常性の哲学など、現代的な感性への志向を、口語自由詩への傾向を強める詩形において表現するエマスンの詩の全体像を提示することが、エマスンを知る上でよい導入になることを、国内外の学会で発表し、また、研究成果をエマスンの訳詩集にまとめる作業を進めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,900,000	0	1,900,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	480,000	3,980,000

研究分野：アメリカ文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：エマスン、ホイットマン、ディキンソン、ロマン主義、象徴主義、イメージ、ジニアス

## 1. 研究開始当初の背景

エマスはアメリカ文学の豊かな源泉としての真価を充分評価されているとはいえない。とりわけ日本ではエマスは言及されるけれどもあまり読まれることのない作家になっていた。また、日米を問わず、現代の読者がエマスの著作から、彼が 19 世紀アメリカの知的リーダーとして、アメリカの思想や文学に大きな影響を与える存在であったことを実感するのは難しい。プラグマティストたちの民主主義の思想家としてのエマ

ス評価も普及しなかった。20 世紀になるほどに、エマスは詩人としても思想家としても中途半端だとみなされ、生涯に亘って詩を書き続けていたにも関わらず、また、「詩人」が彼自身の自己規定であったにも関わらず、詩人であることは彼の思想の神秘的な側面を中傷する言葉として使われることが多かった。

アメリカでは 1980 年代以降、エマスを 20 世紀の哲学やアメリカ詩人の祖とする研究が哲学者、文学者から次々現われ、エマ

ンはキリスト教に代わって「自己信頼」をアメリカの宗教にしたと言われるほど、アメリカの精神を定義しなおした人としての再評価が進み、さらには、社会改革者としての側面にも注目が集まるようになった。しかし、依然として、研究はエッセイ中心であることに変わりはない。

## 2. 研究の目的

エマソンは哲学者なのか詩人なのかという、彼の生きていた時代から今に続いている問いを肯定的な意味に立て直し、実際に詩を書いた詩人としてのエマソンを再評価することによって、エッセイに表れるエマソンの思想と表現の独自性が明らかになるという道筋を示すことをめざした。詩からエッセイへという方向性はエマソンのエッセイの構成そのものが示唆するものでもある。エマソンはエッセイの冒頭にエピグラフとして、自作の詩を置いた。エマソンの詩は彼の思考の本質を表題化する役割を果たしているのではないかという仮定にたって、個々の詩を検証することで、詩とエッセイと二つの様式を必要としたエマソンの思想がもつ問題・特質、エマソンの関心の射程の全体を明らかにする。

メルヴィルの作品にも明らかなように、エマソンの時代のアメリカ文学は、神とは一般法則とは何かを主題とする哲学・思想性の強いものであった。詩と思想との親近性自体にアメリカ的な特色があり、その中には、エマソンがめざした、後のプラグマティズムにも通じる、哲学者ではない自己を信頼する普通の人々による思考の可能性を開く表現への模索があったと考えた。また、イメージを重視する絵画的な言語を志向する文学性によって、抽象を志向する思想は同時に生のリアルな感覚に訴え、意識のより広範な活動を表現した。これら矛盾する志向を全体として捉えることを示唆したことがエマソンの現代に通じる力となっていることを示す。

抽象的な思想家ととると単純にも、捉えどころのないようにもみえるエマソンだが、彼の詩を読むと、より多くの読者にその本質が読みとれるものになり、アメリカ思想の体現者として読む価値のあるものになることを例証する。その成果はエマソン論と、エマソン詩集との2冊の本にまとめることによって、エマソン研究、アメリカ研究に資すると共に、より広範な読者にもエマソンを広めるための基礎的文献を提供することができる。

## 3. 研究の方法

詩という解釈の自由の大きな形式、エマソンという広範な知識を背景にもち、必ずしも論理的な読めば分かる文章とは言えないものを書く作家をよりよく理解するためには、

共同研究は非常に有効な方法であると考えた。4人の研究分担者は月例の研究会をもち、エマソンの2冊の詩集 *Poems*(1847)、*May-Day and Other Pieces*(1867)に収められた詩を中心に、翻訳することもあわせて考えながら、順次読み、解釈を深めていった。海外研究協力者には、普段はEメールで研究会の報告を行い、疑問点の解決や、論点についての議論を行った。

詩をエマソンのエッセイを理解するためのキーワードとしてエマソンの作品全体のなかに位置づけるために、小田、藤田、パターンソンはエッセイと詩とを相互参照しながら、エマソンの詩法、その思想的裏付けを検証した。武田は同時代の詩人ディキンソンやロマン派の詩人の翻訳経験を基に、野田はメルヴィルの用語法との比較から、エマソンの表現上の特徴を検証した。その結果をビュエル教授に報告し、評価と助言を得た。

平成18年度、19年度はアメリカで、20年度は日本で、研究協力者との研究会をもち、メールでのやり取りを補う議論をし、また、学会などで他の研究者に成果を公開し、助言を得ることで、研究の深化を図った。

## 4. 研究成果

エマソンの詩を訳詩の出版を念頭において精読に基づいて研究していくことは、アメリカ人研究者にも新鮮な刺激を与えるもので、パターンソンからこの研究のことを聞いたエマソン学会の前会長サラ・ワイダー教授からも協力を得ることになった。また、エマソンの原稿の編纂者であり、現在、ハーバード版全集の *Poems* 編集に携わっているロナルド・ボスコ教授とも平成18年度に議論する機会を得、詩集の編集方法について、トピック別に分類することの有効性について賛意と助言を得ることができ、以後の研究に役立った。

詩を研究することは、エマソンの思想における「詩的」、芸術的な価値を再評価することであり、ホイットマンやディキンソンの先達詩人として、エマソンの詩を再評価することであり、武田のディキンソン研究、詩の翻訳研究の経験が役立ち、訳詩の原稿作りも進んだ。また、エマソンがイギリス・ロマン派よりも、後続のアメリカ詩人にいっそう近い詩形式とテーマを具えているという性質が明らかになった。

18世紀以来のロマン主義、啓蒙、科学思想の文脈のなかでのエマソンの革新性は、以下の論文で検証された。複雑な概念を単純化しない着実な論証が評価された。

①藤田佳子 「エマソンの山岳詩におけるロマン主義のかたち」  
ヨーロッパロマン主義の特質を〈noble

savage)と〈崇高なる山〉の2点にしばって、エマソンの山岳詩におけるその現れ方を見る。アメリカ固有の土地を背景にこの二つの概念は興味深い継承と発展の相を見せるが、ここにひとつ破壊的な形で侵入してくる新たな要素がある。それは、当時の思潮を背景にエマソンに特に強く喚起された科学への関心である。

② 藤田佳子 「A Double Image of a Mountain in 'Monadnoc」

主題のモナドノック山は、ロマン主義の〈永遠と崇高〉のイメージと共に、〈消滅〉の要素を深層部において併せ持っている。この二つの特質は作中、融合、昇華することなくこの詩をきわめて解釈困難なものにしている。山に賦与された二重のイメージの背景をエマソンの自然観の変化、発展から解明する。

エマソンの第一の特徴である詩及びエッセイの複雑な文体が、彼の思想といかに関係しているかについての考察が、以下の2編でなされた。ホーソーン、メルヴィルのものとされていたアメリカ的なメタ意識の源流にエマソンが連なることは、アメリカ文学研究者の興味を引く点である。

① 藤田佳子 「エマソンのエピグラフについて」

各エッセイの冒頭にエマソンが自作の詩をエピグラフとしてあげた意味を考える。エッセイには複数の声が響きあい、豊かな美しさを創造しているが、論旨を追うにはときに困難が伴う。一方、エピグラフでは詩的イメージを駆使して、エッセイの理念が伝えられる。このように、視覚、聴覚両面で相異なるモードに従いながらメッセージが相補的にエマソンのエッセイを形成しているのである。

② 野田 明 「エマソンの文体と美学への覚え書—その矛盾と自意識—」

「愚かな首尾一貫性」という挑戦的な言葉を発したエマソンの作品には、創作過程への自意識が作品のメタ構造となって表現されていることを、彼のアフォリズム、エッセイ「経験」、「マーリン I」など三つの詩を例に論じる。鮮明と思えるアフォリズムさえ、その文脈は複雑で、意味が千変万化するところに、エマソンの主題と形式の一致を認める。

エマソンの最重要観念である「自己信頼」の裏面である「ジニアス」の観念が、エマソンの詩作にとって本質的なもの、エッセイよりも詩によってよりよく表現されるものであることを、次の2編で明らかにした。抽象概念として論じられてきたジニアスを具体的な自然の観点から捉えたところがアメリカ人研究者に評価された。

① 小田敦子 「'A Stroke of Genius'—エマソンの詩 "The Snow-Storm"」

エマソンが自身を詩人、それも古代ケルトの吟遊詩人として定義したことには、「ジニアスに打たれて」発せられた絵画的な、イメージ豊かな人類最初の言語を表現すること、つまり、人間の内なる自然の創造力、生命力を人間の精神性(ジニアス)として捉えようとする志向がある。詩に現れた自然と芸術の対峙が、自己信頼の表現でありうることを例証した。

② 小田敦子 「エマソンの詩"Woodnotes II"と土地の霊 (*Genius Loci*)」

白松にニューイングランドの土地の霊の象徴を見、その大枝が「ジニアスの一刷け」とばかりに風に揺れる音に、詩人が表現すべき変容する自然の生成力を捉え、それをルーン文字、アメリカ語と反対の普遍言語としての古代アングロ・サクソン語と捉えるなど、詩に潜む、主観性やアメリカ精神及び言語の見方の現代性を指摘した。

エマソンは同時代への鋭い観察眼と意見を持っていた。それは最近注目されている社会改革者としての側面である。彼の社会批評にも、言語への関心が思考の基盤にあることに重きをおく点が本研究の特徴である。そのため、彼の周囲の文学者たちと問題意識が共有されていることをあわせて考察したのが以下の3編である。

① 小田敦子 「エマソンの『マスター・ワード』」

ホーソーン「旧牧師館」中のエマソンの描写を、エマソンのエッセイ「詩人」、「経験」、「超越論者」が問題にしていることと比較して再考すると、ホーソーンが「詩人」としてのエマソンに必ずしも否定的とはいえない、むしろ、同時代の精神への批評として共感するものを持ち、エマソンの言葉の影響力、無意識を解放し表現する力の真価を認めていたことを明らかにした。特に両者に共通する「行列」への関心には、ジニアスの観念にある公共性、そして、シンボリズムの捉え方など、重要な問題意識の共有が認められる。

② 藤田佳子 「フラーの『五大湖の夏、1843年』—多元文化と伝承の観点から」

アメリカの先住民、チェロキー族の強制移住に関して、唯一エマソンが公的に抗議の声をあげたという史実を念頭に置き、エマソン周辺の超越論者の著作における先住民表象を考える。フラーの旅行記『夏』では、旧来の先住民蔑視の父権的テキストに対抗する形で、ヒューマニズムに根ざすフラー独自のテキストが織り込まれていく。最終的に『夏』は、高貴にして悲劇的な先住民像を読者に提示しおおせるのだが、結局、当時の反先住民色濃厚な社会において、文学畑ではエマソン、フラー、ソローのみが先住民理解の足跡を残していることが分かる。

③小田敦子 「エマソンのアングロ・サクソニズム」

アメリカの土地の霊に従い、アメリカの国民精神を創造しようとしたエマソンのアングロ・サクソニズムは、19世紀に人種的イデオロギーに変質し、時代の合言葉となるアングロ・サクソニズムとは一線を画していた。講演や *English Traits*、公式行事用を含め関連する詩から、エマソンの雑種性、普遍性をめざす考え方を検証した。

ホーソンとエマソンとに共通する同時代への問題意識については、オクスフォード大学で開催されたエマソン・ホーソン・ポー合同学会でも“kin”と“kindness”という観念について発表し、高評を得、ホーソン学会においては、ホーソンとエマソンというテーマが定着するなど、ホーソン研究にも貢献した。

以上のように、エマソンの詩の思想上、形式上の論点をかなり明確化することができた。最終年度には、この成果をアメリカ文学会関西支部で“The American Landscape in Emerson’s Poems”というフォーラムを開き発表した。パターンソンの基調講演 “Of Sannup and of Squaw’: Emerson, Hybridity, and the American Legacy in ‘Musketaquid’” の後、藤田が “Monadnoc”、小田が “Woodnotes II” について発表し、風景詩の中に込められた、社会問題から言語の伝統までエマソンの複雑な思考の一端を伝えることができた。学会員からも意見や助言を引き出すことができ、エマソンをよりポピュラーな存在にしたいという目的を少し達成することができた。今後は、まず、訳詩集を完成させ、より広い読者に、エマソン理解のための基礎的文献を提供し、エマソン研究が継承され、進展する基盤を強化していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

1. 小田敦子 「エマソンの詩 “Woodnotes II” と土地の霊 (*Genius Loci*)」三重大学『人文論叢』(査読無) 第 26 号 2009 75-84
2. 小田敦子 「エマソンのアングロ・サクソニズム」三重大学 *Philologia* (査読無) 第 40 巻 2009 83-98
3. 藤田佳子 “A Double Image of a Mountain in ‘Monadnoc’” 東大阪大学『教育研究紀要』(査読有) 第 6 号 2009 55-58
4. 小田敦子 「‘A Stroke of Genius’—エマソンの詩 “The Snow-Storm”」三重大学

*Philologia* (査読無) 第 39 巻 2008 75-96

5. 野田明 「エマソンの文体と美学への覚え書—その矛盾と自意識—」三重大学 *Philologia* (査読無) 第 39 巻 2008 97-108

6. 藤田佳子 「エマソンの山岳詩におけるロマン主義のかたち」『ヘンリー・ソロー 研究論集』(査読有) 2007 11-20

7. 藤田佳子 「エマソンのエピグラフについて」東大阪大学『教育研究紀要』(査読有) 第 4 号 2007 45-47

8. 武田雅子・Margaret Freeman “Art, Science, and Ste. Emilie’s Sunsets: A Haj-Inspired Cognitive Approach to Translating and Emily Dickinson’s Poem into Japanese” *Style* (査読有) Vol.40-No. 1&2 2006 109-27

9. 武田雅子 “Emily Dickinson’s ‘Luxury’ Poem (Fr819)”『大阪樟蔭女子大学論集』(査読無) 第 43 号 2006 13-21

10. 武田雅子 「日本語と英語の狭間で—*In Search of Emily Dickinson* 編集裏話」『大阪樟蔭女子大学英文学会誌』(査読無) 第 42 号 2006 41-58

[学会発表] (計 5 件)

1. 小田敦子 “The *Genius Loci* in Emerson’s ‘Woodnotes II’” アメリカ文学会関西支部例会フォーラム “The American Landscape in Emerson’s Poems” 2008 年 6 月 14 日 聖和大学

2. 藤田佳子 “A Double Image of a Mountain in ‘Monadnoc’” アメリカ文学会関西支部例会フォーラム “The American Landscape in Emerson’s Poems” 2008 年 6 月 14 日 聖和大学

3. 武田雅子 “Why Emily Dickinson Is Difficult to Teach in English—Challenges to Teaching Dickinson in Any Language” 国際 Dickinson 学会 2007 年 8 月 3 日 京都パレスサイドホテル

4. 藤田佳子 「エマソンの山岳詩におけるロマン主義のかたち」日本ソロー学会全国大会 2007 年 10 月 12 日 広島経済大学

5. 小田敦子 “Re-reading ‘My Kinsman, Major Molineux’ in Emerson’s Contexts” “Transatlanticism in American Literature: Emerson, Hawthorne, and Poe” Conference 2006 年 7 月 15 日 オクスフォード大学

[図書] (計 4 件)

1. 藤田佳子 南雲堂フェニックス『英語文学とフォークロア』(風呂本、松本編) 「フラワーの『五大湖の夏、1843 年』—多元文化と伝承の観点から」2008 40-54

2. 小田敦子 松柏社 『アメリカン・ルネサンスの現在形』(増永俊一編共著) 「エマソ

ンの『マスター・ワード』 2007 52-89  
3. 武田雅子・Margaret Freeman Myrifiel  
Press *Lay This Laurel :A Festschrift for  
David Porter* “Apprehending Luxury as  
贅沢を予知する: Translating Dickinson’s  
Luxury Poem into Japanese” 2008 69-91  
4. 武田雅子・桂文子・岡村真紀子 英宝社  
『ソネット選集—ケアリからコールリッジ  
まで—』 2007 1-215

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小田 敦子 (ODA ATSUKO)  
三重大学・人文学部・教授  
研究者番号: 80194554

### (2) 研究分担者

野田 明 (NODA AKIRA)  
三重大学・人文学部・准教授

研究者番号: 40218326

武田 雅子 (TAKEDA MASAKO)  
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号: 30024475

藤田 佳子 (FUJITA YOSHIKO)  
神戸女学院大学・文学部・非常勤講師  
研究者番号: 60079085

### (3) 連携研究者

#### (4) 海外研究協力者

Anita Patterson Boston University・  
Associate Professor  
Lawrence Buell Harvard University・  
Professor